

南北朝鮮労働党の研究（四）南朝鮮労働党の結成 [後編]

森 善 宣

*A Study on Korean Worker's Parties (KWP), South and North
(4) the Formation of South Korean Worker's Party (SKWP) [Part II]*

Yoshinobu MORI

はじめに

1945年8月から北緯38度線を境として朝鮮半島の南北を米ソ両軍が分割占領する状況下、南朝鮮地域で軍政を敷いた米軍は、米軍上陸予定日だった9月6日にその樹立を宣言した「朝鮮人民共和国」【以下「人共」と略記】を抑圧した。自らが「唯一の政府」だと声明しながら米軍政は、帰還した「大韓民国臨時政府」【以下「臨時政府」と略記】の李承晩、金九ら要人たちを中心に「管理委員会」を構想し、米本国政府の正式な朝鮮政策である「国際的信託統治計画」に反対した。

転機は、1945年末から翌年1月にかけて起こった「信託統治紛争」だった。この朝鮮に対する信託統治実施をめぐる賛反の紛争を契機として米軍政は反共主義政策に転じ、臨時政府要人たちが米軍政庁舎内で創設した「非常国民会議」を母胎として「大韓国民代表民主議院」を立ち上げた。これに対抗して朝鮮共産党を中心とする左翼陣営は1946年2月に「朝鮮民主主義民族統一戦線」【以下「民戦」と略記】を結成し、前年12月に米英ソ三国外相会談が採択した「モスクワ協定」で開催が定められた「米ソ共同委員会」に臨み、「信託統治紛争」で損なわれた力量を再結集しようとした。

ところが同年5月、米ソ共同委員会は信託統治実施を定めた「モスクワ協定」に反対を唱える「意思表示の自由」をめぐり紛糾し、失敗してしまった。この失敗を受けて米軍政は同年6月に「左右合作」運動を開始し、左右翼の両極端を切り捨てた穏健派を結集させ、米ソ共同委員会の再開に備えようとした。米軍政では朴憲永はじめ朝鮮共産党幹部たちの逮捕を指令すると共に、「南朝鮮過渡立法議院」【以下「立法議院」と略記】設立の選挙を南朝鮮地域だけで実施すると公布した。

この米軍政による弾圧を伴う「左右合作」政策は左翼陣営を分裂させ、1946年後半に進展した朝鮮共産党、朝鮮人民党、南朝鮮新民党の三党合党の動きに楔を打ち込んだ。左翼陣営は、朝鮮共産党の最高指導者と見なされていた朴憲永を支持する勢力と彼の主導権に反対する勢力とに内部分裂して争うことになった。時あたかも1946年9月から12月にかけて南朝鮮全域で民衆蜂起が拡散し、分裂した左翼勢力が充分にこの蜂起を指導できぬ中、南朝鮮労働党【以下「南労党」と略記】が結成されるに至る。既に北朝鮮地域では北朝鮮労働党【以下「北労党」と略記】が同年7月に結成されており、この北労党から出された南労党結成への支持声明が窮地の朴憲永に最高指導者としての正当性を与えたのである。

本稿は前稿の前編と合わせて南北朝鮮労働党を研究する第4回目の連載論考として、米軍政の占領下で抑圧を受けた共産主義勢力が「信託統治紛争」を経て戦術転換に踏み切り、民衆蜂起の真っ只中で1946

年11月に北労党の協力により南労党を結成する経過を再検証する。後編にあたる本稿ではまず、南労党の結成過程での左翼陣営分裂の内部的な原因、すなわち朝鮮共産党、朝鮮人民党、南朝鮮新民党という三党の路線の相違を北朝鮮地域の北労党とソ連軍からするこれら三党の政治指導者に対する働きかけと絡めながら考察する。そして、朴憲永を支持する北労党の決定書採択へ至る南労党結成の経緯をその結成大会の様相と合わせて再構成し、南労党の実態を明らかにする。

第12章 左翼陣営の分裂と北労党の関与

南労党結成の過程における左翼陣営の分裂は、前稿で述べた米軍政の切り崩し策だけでなく、それに翻弄された左翼陣営内の路線闘争にもその原因がある。ただし朝鮮共産党の「統一戦線」戦術は、米軍政が推進した「左右合作」運動という対抗策により見事に逆ねじを食らい、かえって分裂をもたらす失策となったからである。この路線闘争に関与したのが北労党とその背後にいたソ連軍であった。

第1節 左翼陣営分裂の内部的な原因

左翼陣営の路線統一ができなかった大きな理由は、朝鮮共産党、朝鮮人民党、南朝鮮新民党の最高指導者のうち前者と後二者の間でその路線に明確な相違があり、またその相違が左翼陣営からする運動の主導権をめぐる闘争と結び付いたからだった。既に朴憲永が提唱した路線に関しては論述したので⁽¹⁾、本節では後二者の路線を検討し、左翼陣営分裂の内部的な原因に考察を加えたい。

呂運亨と朝鮮人民党の路線

「人共」樹立宣言を主導した朝鮮人民党々首の呂運亨は従来その天衣無縫な活動歴から、右翼からは急進主義者、左翼からは日和見主義者と見なされてきた。だが彼が解放政局で表明した政治的見解からは、右翼の評価も左翼のそれも正鵠を射ていないことがわかる。

呂運亨は「人共」の樹立経緯についての質問の中で、「人共」が「赤い」すなわち共産主義だとの意見に次のように答えた。「抱腹絶倒する意見だ。(中略)労働者、農民および一般大衆のための共産主義か。万一そうならば、私は共産主義者にもなろう。労働大衆のために余生を捧げよう。(中略)私は共産主義を恐れない。しかし急進的左翼理論を私は正当だとは思わない。」⁽²⁾

呂運亨は共産主義勢力との連携もいとわなかった反面、その急進主義的な理論や行動を評価していたわけでもなかった。ただし、後述するように彼が北朝鮮地域へ旅行して政治勢力を統合しようとする場合、かなりの程度において政治的な妥協や譲歩はやむを得なかったことが容易に想像できる。

左右翼の著名な独立運動家を網羅して自らが樹立宣言した「人共」を米軍政に否定された呂運亨は、1945年11月12日に「朝鮮人民党」を結成し、政党としての体裁の下に活動を展開しようとした。この朝鮮人民党は「韓国民主党が有産階級を代表した階級党であり、朝鮮共産党が無産階級を代表した階級党であるのに比べ、我が党は反動分子だけを除外して、労働者、農民、小市民、資本家、地主までも包含した全人民を代表した大衆政党なのである。」と自らを性格規定していた⁽³⁾。

その党首の呂運亨が「左右合作」運動を開始するに至ったのは、次のような理由からだった。「いわゆる自律政府あるいは単独政府は樹立され得ず、万一わたしにそのような交渉があったとしても反対する。米ソ共委[米ソ共同委員会の意一筆者]の消極的再開促進運動に、むしろ我々が主体となって積極的に運動を展開しなければならないだろう。このような機会には民族を代表する機関を設置するため、私個人の努力でできる共通点を発見し、左右翼間に介在するあらゆる利害と感情を超越した代表的機関を設置し、米ソ共委の再開に努力し、完全な臨政[「モスクワ協定」で定める「朝鮮民主主義臨時政府」の意一筆者]が樹立される時まで軍政に協力していかなければならない。真実の統一政府は、左右合作から樹立される

ものであり、決して左や右だけの単独では樹立され得ないものであり、樹立されたとしても持続性がないものである。」⁽⁴⁾

このように呂運亨は「民族」の性格から導き出される「左右合作」運動に邁進し、米ソ両軍との協力下で「統一政府」を樹立しようとした。だが「左右翼間に介在するあらゆる利害と感情を超越」することは即ち、民族主義と共産主義のズレを埋めることに他ならず、そのどちらからも反発を受けざるを得ない結果となった。呂運亨の暗殺は、ガンディ（Mahatma Gandhi）のそれとも比較できる経緯を持っていた。

白南雲の「連合性新民主主義」論

呂運亨と比べて白南雲はもともと学者であり、のちに北朝鮮初代内閣で教育相となった経歴が示す通り、当時の数少ないインテリゲンチヤの一人だった。彼は自らの路線を「連合性新民主主義」論として提唱すると同時に、朴憲永の「8月テーゼ」に示された路線に明確な反対を表明していた。

白南雲自身が書いた路線の解説によれば、「連合性新民主主義」論とは次のような内容だった。「朝鮮民族の政治路線は歴史的に単線であろう。それにもかかわらず、乱立した右翼政党が少数に合同したのは自省の結果と言えようが、大体において左右政党の樹立は階級性の必然的な反映である。しかし、どのようにしても一階級や一党だけが朝鮮民族の政治問題を解決することはできないであろう。それだけでなく既に論述したように、自主独立は朝鮮民族の運命的目標であるから、左右翼が連合遂行する歴史的任務を担当するであろう。（後略）

以上の論述を要約すれば『連合性新民主主義』は、朝鮮社会の革命的勢力の歴史性に依拠した左右翼の政治的連合の可能性を規定したものである。こうして有産階級独裁の自由民主主義を拒否すると同時に無産階級独裁のプロレタリア民主主義とも区別される民族的民主主義を言うのであり、朝鮮政治の歴史的瞬間性から見て階級的民主主義よりも過渡的形態として民族的な連合性新民主主義だけが民主的統一と自主独立を遂行できるだろうし、民主政治と民主経済問題の同時解決を国策化できる。

白南雲は、このような性格規定の上で「朝鮮現段階においては『自主独立』即ち『民族解放』は民族主義者と共産主義者に共通する民族的要求であるだけでなく、社会的革命勢力の歴史性から見てもその民族的要求を遂行するためにはまた、連合遂行する歴史的任務を担当するものと考え」と述べて、中国の国共合作やインドでのガンディとジンナー（Muhammad Ali Jinnah）の協力などの事例をあげていた⁽⁵⁾。

白南雲の路線は明らかに、南朝鮮新民党の母体「朝鮮独立同盟」が「延安派」として中国で活動指針としていた毛沢東の著作「連合政府論」や「新民主主義論」に示された路線からそのエッセンスを取り出していた⁽⁶⁾。だが毛沢東とは異なり白南雲が「左右合作」運動において自らの提唱した路線に従い、また朴憲永の主導する南労党の結成に反対して左翼陣営の分裂をもたらしたのは、民族主義と共産主義のズレを余りにも無邪気に左右翼の「連合遂行」により解決できると考えたからだった。

つまり南労党の結成経緯に現れた左翼陣営の分裂は、陣営内部の路線闘争と米軍政による「左右合作」政策とが相互作用するところから由来していた。この「左右合作」運動と連動する左翼陣営の分裂が明確化したのは、他ならぬ南労党結成の提起を受けた朝鮮共産党内部の対立からであった。そして、この対立が既に南朝鮮全土に拡散しかけていた民衆蜂起を背景として激化したのである。

第2節 南労党結成の提起

南労党の結成が推進される過程で南朝鮮地域に民衆蜂起が拡散していった。「9月ゼネ・スト」、「10月人民抗争」と言われる労働者・農民の反乱は、首都ソウルでの左翼陣営の分裂と絡まり十分な指導を得られないまま、米軍政とその配下にある警察力により鎮圧されていった。

「9月ゼネ・スト」、「10月人民抗争」の勃発と展開

「9月ゼネ・スト」、「10月人民抗争」の原因と主導勢力についての見解は、今だその政治的な立場によ

り大きな差異がある。そこで、ここではその勃発と展開の有様を素描するに止めたい。そもそも「10月人民抗争」は1946年9月24日に起きた「9月ゼネ・スト」に端を発していたので、ふたつの民衆蜂起の勃発と展開は、次のような一連の事態として記述できる。

「民戦」傘下の南朝鮮鉄道労働組合は米軍政に待遇改善を要求していたが、何らの回答もないとして釜山地方の鉄道労働組合がまず「その出発から政治的性格が濃厚な」ゼネ・ストを開始した⁽⁷⁾。このゼネ・ストはソウル、大邱などの大都市へ拡散し、また他の業種や職種にも広がっていった。

これに対して南朝鮮地域における米軍の最高責任者ハッジ (John R.Hodge) が声明を発したが効果はなく、警察がストに対抗することになった。同年10月1日にコメを要求した大邱の群集に警官が発砲し、多数の死傷者を出したことから、学生や青年など一般市民が加勢する中、群集は武装反撃に出た。この消息は全国へ伝わり、民衆が植民地時代からの怨念の府だった警察を襲撃しただけでなく、次第に都市部から農村部へ波及する農民たちの蜂起を引き起こしていった。

米軍政は、蜂起の起こった現地の警察力を動員すると同時に「戦略部隊 (tactical troops)」を派遣して治安の回復にあたった。この民衆蜂起を米軍政では朴憲永の指令、したがって彼の背後にいる「国際的」共産主義勢力の仕業だと見なし、「米国ならびに米軍政の信用を失墜させ、[左右] 合作活動を破綻させようという目的」だ考えていた⁽⁸⁾。

さらに警察側の資料によると、このような民衆蜂起は次項で見る反朴憲永派である「大会招集派」を「暴力で抑圧すると同時に、米軍政に反対して共産党の勢力を拡大する政治的目的」だと分析されていた⁽⁹⁾。確かに朴憲永派が書いたと考えられる資料でも「いわゆる社会労働党【以下「社労党」と略記】幹部たちは、人民の抗争が武装反乱化したことに対して遺憾の意思を表示すると同時に、これを全然まちがったことだと非難している」として、彼らが李承晩や金九など民族主義の極右派と同じだと断じたのである⁽¹⁰⁾。

民衆蜂起が自然発生的に時間をかけて拡散した様子は、それが何らかの政治目的を掲げて一時期に集中して起こらなかったことから明白である。つまり共産主義勢力は、ソウルで三党合党の政争に明け暮れる余り、その蜂起を一定の政治目的の達成に導くことができなかつた。こうして「9月ゼネ・スト」とそれに続く「10月人民抗争」は、いわば首都で繰り広げられた政争の具となり、ほとんど何らの成果もないまま鎮圧されてしまった。

南労党結成の提起と「大会招集派」の主張

この民衆蜂起に先立つ1946年8月4日、朝鮮人民党中央委員会から同党々首の呂運亨名義で朝鮮共産党と南朝鮮新民党の各中央委員会へ三党合党の提案がなされていた。これに対し朝鮮共産党は同日、党中央委員会を開き、翌5日に朴憲永の名義でこの提案に賛成する返信を送った。南朝鮮新民党も、同月7日に白南雲の名義でこの提案に原則的に賛成する返信を送った。米軍政の資料によると、呂運亨が合党に同意したのは「左翼の合党が共産党内のグループに党から朴憲永を追放する機会を与えるだろう」と考えたからであった⁽¹¹⁾。

ところがこの5日には朝鮮共産党内の姜進^{カンジン}、徐重錫^{ソジュンソク}、金鋳洙^{キムチュルス}、李廷允^{イジョンユン}、金權^{キムクワン}、文甲松^{ムンカプソン}の6人が、朝鮮共産党、朝鮮人民党、南朝鮮新民党の三党合党に対する自分たちの立場を表した。彼らは、朴憲永の側近中の側近だった李舟河^{イジュハ}、金三龍^{キムサンニョン}、李鉉相^{イヒョクサン}などをあげて「今回の合党問題を契機として再び彼ら一派に友党を吸収しようという謀略を事としている」と非難した。その証拠として「ひとつに合党問題を我が党中央委員会に付議する前に、これら一派が専横的に友党に対する交渉を開始し、対外的に表明した (中略)、昨4日に中央委員会で官僚主義者、派閥主義者を合党交渉および準備委員に参加させ得ないという我々の提案を頑強に拒否した (中略)、同志朴憲永は『我が派だけで合党工作を遂行しなければならない』と明白に宣言した」ことなどが列挙された⁽¹²⁾。ここから三党合党は朝鮮共産党から仕掛けられ、朴憲永は既成事実

を積み上げるやり方で自己の主導権を掌握しようとしたことがわかる。

このやり方にこれら6人は激しく反発し、党大会の開催による問題の討議と共に党執行部の改編を要求し、友党の党首も対象に含めて合党反対の工作を進めた。その結果、朝鮮人民党と南朝鮮新民党でも南労働党の結成をめぐり、賛成派と反対派がそれぞれ朴憲永支持派と朴憲永反対派となり分裂した。

そこで朝鮮共産党では、これら6人をはじめとする「大会招集派」を党から除名したり党員資格の停止処分に付したりして事態の收拾を図った。しかし反朴憲永派は1946年10月15日、呂運亨、白南雲、姜進の連名で「左右合作は我々が熱烈に支持するところ」とし、米軍政が推進していた「立法議院」の設置を「我々の民族的要請を去勢したもの」とこれに反対する声明を出して、社労党結成の「決定書」を採択した⁽¹³⁾。そして彼らは同年11月12日、南労働党とは別個の社労党結成を示す同党臨時中央委員会を開催し、南労働党との統合を再交渉することとした⁽¹⁴⁾。

これより遅れること同月23日、朴憲永派を中心に南労働党が結成されることになる。この民衆蜂起の中で深化する左翼陣営の分裂を注視していた北労働党では、その過程でこれを收拾するために関与を開始し、平壤を訪れた南朝鮮地域の政治指導者たちに社労党と南労働党の統合を働きかけていた。

第3節 北労働党による三党合党ならびに民衆蜂起への関与

これまで南労働党の結成過程で北労働党が行った関与についてはほとんど知られておらず、両党の連携を示す資料も少なかった。この意味で筆者が入手した『シトゥイコフ備忘録』【以下「『備忘録』と略記】は、その朝鮮共産主義運動の最も深いダイナミクスに光を当てる貴重な資料である⁽¹⁵⁾。

北労働党による三党合党への関与

この時期は米ソ共同委員会の再開が重要な問題の一つとして論議されており、朝鮮の南北地域を問わず労働党の結成もこの問題との関連の中で考えられていた。北労働党ではソ連軍との密接な連絡の下で、南朝鮮地域での三党合党に対して1946年9月頃から本格的な関与を開始した。

特に南朝鮮地域で三党合党の中心として朝鮮共産主義運動を指導していた朴憲永については後述するのように、1946年6月7日に米軍政から出された逮捕令を免れるため、彼を北朝鮮地域へ逃避させようとした。北朝鮮地域におけるソ連軍の最高責任者だったシトゥイコフ（Terenti Shtykov）は明確に「米軍政の目的は、南朝鮮共産党を破壊し、李承晩とその徒党のスケープ・ゴートと見なすことだ」と書いていた⁽¹⁶⁾。

この朴憲永と関連して1946年9月24日の『備忘録』には、南朝鮮地域から平壤に到着した南朝鮮新民党中央委員会委員で宣伝部長だった高賛輔コ・サンフの談話が次のように記録されている。「一部の共産主義者たちが【朝鮮】人民党と【南朝鮮】新民党に入党しているが、彼らが合法的に活動するようにならなければならない（後略）。（中略）朴憲永が何か事を推進すると、10日が過ぎた後に初めて知ることになる（後略）。朴憲永は高賛輔に3名の指導者を推薦したが、このうち2名が共産主義者だった」⁽¹⁷⁾。つまり朴憲永は「統一戦線」戦術を使って朝鮮人民党や南朝鮮新民党に自らのシンパサイザーを送り込んで秘密裏に活動させていた。これが三党合党に障害となる朴憲永の独断的なやり方と見なされていたのである。

もちろん朴憲永だけでなく、北労働党もソ連軍の指令に従って動いていた。シトゥイコフは同年9月26日に次の指令を下した。「1. 北朝鮮の指導者たちに呂運亨との会談を許容する、2. 南朝鮮の左右合作を推進しない、3. 南朝鮮の左翼3党の合党を暫時、中止する、4. 共産党は必ず合法的に存在する、（中略）6. 米軍政が南朝鮮に樹立しようとする政府に参与しないこと（後略）。」⁽¹⁸⁾

この指令を受けて北労働党では翌27日に会議を持ち、この中で北労働党中央委員会委員長の「金料奉キムトッボンは、金日成をして発言させ、ソ連側の要求条件を陳述させようとする提案した」という。あたかも金日成が政策を執行しているかのように偽装するためだった。だが言うまでもなく、これら北朝鮮現地で進行している事態に関しては、ほぼ全てソ連共産党首脳部へ電信で詳細に報告されていた⁽¹⁹⁾。

ソ連軍の威信、さらにはスターリン (Joseph V. Stalin) の絶対的な権威を背景として、北労党の政治指導者たちは当初から強い態度で南労党の結成過程に自らの見解を表明した。前述の「9月ゼネ・スト」や「10月人民抗争」を受けて金日成は、次のように述べていた。「宗派主義者たちと姜進は人民大衆を欺瞞した。彼は、170名近い人々を招集し、共産党中央委員会と反対派の統合という口実の下に大会を開催して、もう一度、人民大衆を欺瞞した。(中略) 呂運亨も大衆を欺瞞した。彼は社会労働党中央委員会を組織した。この2つの組織の中央委員会の成員は、全て宗派主義者たちと親米分子たちで構成された。」⁽²⁰⁾

民衆蜂起の進行する中で、「呂運亨は——彼が平壤からソウルへ戻った後にハッジが彼を呼び出し、左右合作の必要性を認定することを要請した——という手紙を送って来て」いた。正にその直後、平壤で北労党々首の金料奉が白南雲を接見していた。

「なぜ左右合作に同調したのか、なぜ北朝鮮からの指示を履行しないのか」という金料奉の質問に白南雲は「自分が北朝鮮からの指示を履行しており、それゆえに社会労働党を組織したと答弁」した。これを聞いて金料奉は「主要指導者3名が一緒に会おうと提案した。そして姜進が北朝鮮に来なければならない」と主張したが、「金日成は反対した」という。「白南雲は、社会労働党を正当化するために平壤へ来た」と見なされていた⁽²¹⁾。

だがこの時、姜進は既に平壤でシトウイコフと面会していた。「朴憲永同志の決定は彼自身だけの見解ではなく、北朝鮮40万党员の見解でもある。(中略) ここにいる全ての人々があなたを米帝国主義の走狗と罵った」というのがシトウイコフの説得で使われた論理だった。姜進は「南朝鮮労働党と社会労働党を結合させる」と答える他はなかったであろう⁽²²⁾。姜進と白南雲は明確に北労党とその背後にいるソ連軍の意向を知った上でソウルへ戻ったのである。

南朝鮮地域の民衆蜂起に対する指導

彼らがソウルへ戻った時、南朝鮮地域は民衆蜂起の真っ直中にあり、「10月人民抗争」が武装パルチザン闘争を生み出していた。『備忘録』には1946年10月下旬、「朝鮮共産党中央委員の趙斗元^{チョドゥウォン}は、今後の活動方針について尋ねている。呂運亨と決定的に決別することが必要かと。(中略) 釜山では農民たちの進出が始まった。いまストライキ運動はある程度、縮小された。彼は今後の闘争をどのように展開しなければならぬか、を尋ねている。彼によれば、パルチザン部隊が存在しており、反動陣営と民主陣営の間に闘争が展開されている。彼は、パルチザン闘争を本格的に開始しなければならぬか、あるいは自制しなければならぬかを尋ねている」と記されている⁽²³⁾。

従来の研究では武装パルチザン闘争は翌々年1948年2月の「2・7救国闘争」後に本格化したとするのが通説だったが⁽²⁴⁾、その開始時期については必ずしも明確ではなかった。1950年6月に開始される朝鮮戦争が南北分断体制間の「内戦 (civil war)」と規定されるならば、南朝鮮地域では既に解放の翌年10月からその萌芽が現れていたことになる。ちなみに武装パルチザン闘争は、南労党の主導下で1949年6月に結成される「祖国統一民主主義戦線」の指導下で最高潮に達する⁽²⁵⁾。

ところで、朴憲永も繰り返してこの民衆蜂起についてソ連軍に報告し、その指示を仰いでいた。彼は「ストライキ闘争は暴動へ成長転化した。山へ入った人々たちには食糧と弾薬が不足している。彼らの今後の闘争方針に関する教示を下してくれるよう要請し」たという⁽²⁶⁾。ここからは、武装パルチザン闘争の開始当初はどのようにそれを展開するかに関して明確な考えがなかったことがうかがえる。ソ連軍はこの闘争に対して極めて重大な関心を払い、11月に入ると「金日成、朴憲永と会談すること。南朝鮮で展開されている諸般の事態に対する評価を伝達する」として、民衆蜂起、「立法議院」創設、三党合党の順にその懸案事項を示していた⁽²⁷⁾。

ここで言うソ連軍の「評価」については明確ではない。ただし興味深いことに金料奉はこれに先立つ同

年9月、「米国人たちが多くの害悪を及ぼしているとしても、米国人たちを度をを超してひどく非難してはならない」と述べていた⁽²⁸⁾。この点は米ソ共同委員会の再開と関連して、朝鮮半島でもソ連軍が米ソ対決策をとらなかった事実と軌を一にする。なぜなら、スターリンは終始一貫、米国との全面対決を恐れていたからである⁽²⁹⁾。武装パルチザン闘争の本格化が遅れたのも、そこに原因があったと推定される。

つまり事実上、民衆蜂起が指導されずに打ち捨てられる中でその作業を中断させていた三党合党が再開され、これに対抗して社労党の結成も急がれたことになる。ソ連軍では「反対派は社会労働党を結成した。社会労働党の綱領が発表された後、大衆はこの党を拒否している。社会労働党が右翼との合同を助け、立法機関〔「立法議院」の意味－筆者〕の組織を支持しているので、左翼政党の憤懣を買っている」と述べていた⁽³⁰⁾。

こうして南労党の結成過程における社労党との対抗関係は、南労党の政治的な位置づけを当初から曖昧とただけでなく、それに比例して朴憲永の強引な指導も許容される結果を招来した。結成当初からの南労党の脆弱性は、必ずしも米軍政による弾圧を伴う切り崩し策のためばかりではなかった。

第13章 南朝鮮労働党の結成

南労党の結成過程を北労党やその背後でのソ連軍の動きと照らし合わせながら検討すると、結成過程に関する従来の見解が事実関係とかなり異なるものであることがわかる。特に南労党の位置づけは、朴憲永に対するソ連軍の評価と合わせて問題の多いもので、南朝鮮地域の共産化へ向けて緻密な計画の下で南労党が結成されたというものでは全然なかったことがわかる。

第1節 南労党の位置づけと朴憲永

シトウイコフは「一般諸問題」として11月初めになっても「南朝鮮労働党の理論、目標および課題、民主主義朝鮮建設の展望」をあげていた。さらに「大衆の中での党のイデオロギー事業、朝鮮で展開されている全ての事態の科学的な解明」を記述し⁽³¹⁾、それら諸問題が未解決のまま南労党の結成が進められていることを示した。

南労党の位置づけ

このように南労党は、当時の政治状況の中で明確な位置づけを与えられないままその結成作業だけが強行される結成過程を描いた。既に同年10月下旬には南労党の首脳部はソ連軍の確認するところであった。すなわち「党の構成」は「委員長 許憲（新民党）、副委員長 朴憲永（朝鮮共産党）、李琪錫（人民党）」とされ、「中央委員会委員45名；朝鮮共産党20名、人民党8名、南朝鮮新民党7名、社会団体10名」、さらに「政治委員会7名、15個の課」と決定されていた⁽³²⁾。

そして南労党は10月中旬に「合党作業が道の水準まで進捗」⁽³³⁾、11月12日には「道の水準まで統合が完了した（中略）。準備委員会が組織されて活動しており、中央委員会の機能を遂行している」と報告された。これを受けて「1946年11月10日、合党大会が開催されたが、米軍政により解散させられた。大会では準備委員会をして大会の職務を遂行させる決定を採択した。準備委員会は自らの権限を強化するため事業を展開して」いた⁽³⁴⁾。

一方で「社会労働党は、ストライキと武装闘争を理由に共産党を非難した。白南雲は、自分は社会労働党の立場に同意せず、社会労働党の宣伝が自分とは関係ないと声明した。姜進も自分の誤謬に対する批判を表明した。呂運亨も自分は参加しないだろうと声明した」⁽³⁵⁾。南労党の結成作業が再開された後、急速に進展した背景には社労党に対する北労党、さらにはソ連軍からの圧力があって、社労党の解体が予測されたからだった。これまでの通説では朴憲永が強引に三党合党を推進させたと考えられていたが、その実

態は朴憲永に対する高い評価をもとに北労党とその背後にいるソ連軍が、朴憲永と協力して社労党の結成を切り崩したということが真実により近いのである。

だが、この朴憲永に対する高い評価は、主にソ連軍によるところが大きかった。その評価と比べて、北労党首脳部はむしろ朴憲永や彼の部下に対して冷遇をしていたかのような印象を受ける記述が『備忘録』には見受けられる。朴憲永に対する評価は、北労党とソ連軍との政治的な立場上のズレを示唆しており、両者が一枚岩でなかった証拠だと言えよう。正に朝鮮戦争は南労党、北労党、そしてソ連という3者の立場のズレから由来した内部矛盾の展開として勃発するのである⁽³⁶⁾。

朴憲永に対する評価

ソ連軍からする朴憲永に対する高い評価は、いくつかの資料で明確に裏付けられる。シトウイコフは「1946年10月6日、朴憲永が南朝鮮を脱出し、北朝鮮に到着した。朴憲永に休息をとるようにせよと指示を下した」と記している⁽³⁷⁾。また後にソ連軍事顧問団長となったラズバエフ (B.N.Razubaev) は、より明確に次のように書き残した。「1946年11月、南朝鮮労働党が創建されて、朴憲永は副委員長に選出されたが、実際には党の指導者だった。(中略) 朴憲永は理論的に立派に準備されており、朝鮮のマルクス主義者のうち最もよく準備されたひとりであり、マルクスレーニン主義の理論分野で自身の知識を高めるところに体系的に臨んでいる。(中略) 朴憲永は北朝鮮と南朝鮮で広範な人民大衆、左翼指導者たち、そして甚だしくは中道政党的指導者たちの中で極めて大きな権威を享受しており、南朝鮮民主主義民族戦線の実質的で思想的な指導者だ。朴憲永は朝鮮の卓越した政治活動家である。確固としてソ連を志向している。」⁽³⁸⁾

ソ連軍からする金日成に対する評価も朴憲永に優るとも劣らず非常に高かったものの、両者の評価で決定的に異なったのは、金日成が「理論的に準備されているが、マルクスレーニン主義の水準を向上させるため体系的に努力しない」とされているところだった⁽³⁹⁾。つまり朴憲永と金日成とは共産主義理論の理解において相当の評価の違いが認められていたのである。おそらく金日成に対する評価と同様な評価は、北労党々首の金料奉においても下されていたのではないかと推定される⁽⁴⁰⁾。

ところが北労党からする朴憲永や彼の部下に対する評価は、ソ連軍からするそれとはかなり異なっていた。例えば朴憲永の最も信頼した部下と言われる李康國は「自身の活動拠点と関連して、北朝鮮から活動空間を移すことを許諾するよう要請してい」たが、この要請は聞き入れられなかったようである。そして、北労党の部署における李康國の「次長任命について」ソ連軍から諮られた時、「金料奉が反対」したのである⁽⁴¹⁾。

特に金日成と朴憲永との間には、金日成の台頭から由来したとされる確執があった。シトウイコフがわざわざ「朴憲永と金日成が親しくするようにせよ、と指示を下した」と記しているほどだった⁽⁴²⁾。これまでは両者の間に不和はなかったとする見解もあったが⁽⁴³⁾、北労党と南労党とりわけその最高指導者だった金日成と朴憲永との間には早くから確執が芽生えていたと見てよかろう。朴憲永による影響力の拡張に対する懸念を前提としてこそ、朝鮮戦争中から金日成が開始した南労党幹部たちに対する徹底的な血の粛清が理解可能となる。

したがって南労党が北労党に遅れること3ヶ月後に結成された時、労働党の南北分立下で朝鮮統一をめぐる戦術を異にする二人の最高指導者が北朝鮮地域に現れることになった。しかも皮肉なことに、南労党の結成を助けたのはソ連軍の意向を受けた北労党だったのである。

第2節 南朝鮮労働党結成大会

南労党結成大会の議事録は現在までのところ発見されていないが、当時の資料や『備忘録』から大会開催までの経緯と大会の様子を再構成すると、大略つぎのようだったと考えられる。前述のようにこの結成

大会は予め決められたスケジュールに従ったに過ぎなかったが、この大会への参加者たちが南労党と社労党との確執の中で自らの政治生命をかけたことは疑いない⁽⁴⁴⁾。

結成大会開催の経緯

南労党の結成を推進する三党の朴憲永派は、自派だけで1946年9月5日に「三党合同準備委員連席会議」を開催し、事実上その結成を決定した。そこでは「南朝鮮労働党」と党名を決定し、合わせて「南朝鮮労働党綱領」を採択した。この綱領は北労党の綱領とほぼ同一で、その第一項には「朝鮮の民主主義人民共和国」という用語が使用されていた⁽⁴⁵⁾。

つまり「人共」支持勢力の中心だった朴憲永が樹立すべきその国名を現在のそれへと変更したことは、南労党が北労党の路線すなわち「民主基地」路線を完全に受け入れたという証左だった。確かに朴憲永が個人的には早くからその受け入れを表明してはいた⁽⁴⁶⁾。しかし朴憲永派には金日成の台頭を快く思わない者が少なくなかったと考えられるところから、南労党が北労党の綱領をそのまま受け入れたのは、左翼陣営の分裂を取捨する北労党の援助に対して朴憲永が支払った政治的な代価だったと思われる⁽⁴⁷⁾。

その援助とは1946年11月16日に採択された北労党中央常務委員会の決定書だった。この決定書は直々に北労党中央委員会委員長だった金料奉の報告を受けて採択されていることから見て、北労党でも極めて重要な案件と考えられていたことがわかる。この決定書では姜進と白南雲を名指ししながら、次のように断罪していた。「彼らの行動は、いわゆる『左右翼合作』に賛成し、南朝鮮に米軍政の植民地的統治を合理化させる立法機関（「立法議院」の意—筆者）の創立を支持する分子たちに助けを与えたものである。（中略）北朝鮮労働党は、朴憲永先生を首位とした南朝鮮共産党および左翼諸党が南朝鮮労働党を創立しようとする事業の行程を全的に支持する。」⁽⁴⁸⁾

南朝鮮地域での三党合党がスターリンの直接指令によるものだった以上、南労党の結成において朴憲永の主導権は貫徹されねばならなかった。この決定書の背後でソ連軍が北労党に働きかけていたことは、まず間違いあるまい。社労党ではこの決定書発表の当日に南労党との「無条件合同」を提案していたが、翌17日には社労党が正式に発足したにもかかわらず⁽⁴⁹⁾、後述するように決定書に驚いた社労党幹部ははじめ多数が自党を脱党して南労党へ入党することになった。このように事態が進展する中で同年11月23～24日、南労党はその結成大会をついに開催するに至ったのである。

南労党結成大会

南労党結成大会はソウル市内の侍天道教会で約1,000名が参加して行われたとある⁽⁵⁰⁾。同大会第一日目には不参加の呂運亨はじめ14名を議長団として選出した後、朝鮮人民党の李琪錫が合党までの経過報告を行った。

この報告では北朝鮮地域の「民主改革」を称賛した後、南朝鮮地域で展開中の「人民闘争」により「民主力量」が発展しているとした。だが精版社事件に言及しつつ、さらに「民主力量が集結される」必要を強調、「労働者、農民、勤労知識層の総力量をさらに強固に広範に集結する方法は、ひとえにこれら階級の前衛分子が、統一した綱領と統一した規約の上で高尚な規律と正確な戦術により、ひとつの政党として結合することだ」と主張した。

これに続いて李琪錫は「反動陣営」からの攻撃中で進展した「合党事業」を説明しながら、次のように述べた。「各道には道準備委員会が組織され、各郡には郡準備委員会が組織され、基本細胞で広く合党の必要性を討議にかけ、党群集の絶対的支持下で細胞から合党を実際に実施し、郡合党、道合党を完了して今日この大会をもつことになったのです。」

そして、北労党の決定書を受けて社労党の「合同提案」を「一蹴してしまった」との勝利宣言からは、両党統合の条件、すなわち社労党を「解体」し「各々が大衆の面前に完全に自己批判し」なければならな

いという条件が提示された⁽⁵¹⁾。この提示を受けて社労党からはさらに脱党者が相次ぎ、彼らのうち多くは南労党へ「帰還」した。

大会ではこの後、呂運亨の祝辞や北労党からのメッセージなどを聴取してから、党綱領および規約を可決した。南労党中央委員会の人的な構成については次稿で詳細に述べるが、大会第一日目の最後に同党の中央執行委員や中央監察委員などの選考が許憲などに一任され、結局は朴憲永派が党首脳部を掌握する態勢が成立した。朴憲永と許憲の関係は、シトウイコフが「朴憲永は今後、活動方針に対する指令を許憲に伝達しなければならない」とはっきり記していたところから明白である⁽⁵²⁾。

大会第二日目は「民戦」傘下の社会団体などからの祝辞の後、米ソ共同委員会や北労党などへのメッセージを採択、最後は「朴憲永万歳！」の大合唱の中で南労党結成大会は終了した⁽⁵³⁾。当日は「テロ分子たちの攻撃を考慮して、予定より5時間も早く閉会した」にもかかわらず、「代議員たちが会場を出ようとする瞬間、2個の手榴弾が爆発、新聞記者2名が負傷した」のである⁽⁵⁴⁾。

大会第二日目の終了後、「道党委員会協議会が招集され、社会労働党に対する南朝鮮労働党の方針と労働党の当面課業についての朴憲永の書簡を審議した」。また、この協議会で党機関紙『労力人民』の創刊を決め、朴憲永の右腕と言われた「李承燁イソンヨフを編集長として承認した」。さらにソ連軍が承認したように、許憲を党委員長、副委員長に朴憲永と李琪錫を選出し、南労党中央委員会政治委員会委員を次の通り決定した。「1. 許憲（新民党）、2. 朴憲永（共産党）、3. 李琪錫（人民党）、4. 具在洙グジュス（新民党）、5. 金龍岩キムヨンアム（人民党）、6. 李承燁（共産党）、7. 金三龍（共産党）。」

なお、この政治委員会とは別に「常任委員会13名」を「共産党5名、新民党4名、人民党4名」で組織したが、その人的な構成は明確でない。同様に南労党中央委員会の人的な構成も未だ完全には確定できないが、シトウイコフは「中央委員会の構成を再編成するように指示する」として「共産党20～23名、人民党15名、新民党7～10名」の数字を書き記していた。この数字は、南労党結成当時の各政党の党員数である「共産党670,444名、人民党23,700名、新民党7,488名」とは関係なしに、三党合党の体裁を取り繕うためのものだったと思われる⁽⁵⁵⁾。

こうして南労党は、米軍政の将校が出席する大会で合法的な政党として結成されたが、その実態は社労党との対抗関係の中で朴憲永に従う活動家たちを集めた政党に過ぎなかった。それで一旦それが結成されると、南労党は自ずと朴憲永の指令に従うようになった。朝鮮半島の南北で異なる政治発展を遂げた情勢を背景に、南労党と北労党とはそれぞれの最高指導者の下で相異なる戦術を追求するようになる。労働党の南北分立とその影響は、南労党の結成後まもなく表面化した。

第3節 南北朝鮮労働党の分立とその影響

労働党の南北分立が南北朝鮮の政治発展に及ぼした影響は、いくら強調されてもされ過ぎることはない。南労党の結成に際してシトウイコフ自身が「成功裏に、そして困難の中で戦い取った合党事業に対し、朴憲永に祝賀を送ること」を指示、その評価を示す一方、「金日成と朴憲永は業務上、緊密な連携を確保しなければならない」と両党間の「連携」に問題があることを暗示していた⁽⁵⁶⁾。

労働党の分立と主導権問題

従来の証言風の研究によると、南北それぞれの地域を朴憲永、金日成が指導する体制の下、北労党は「権威ある線」と言われる工作部隊を独自に南朝鮮地域へ派遣していた⁽⁵⁷⁾。その最も著名な工作部隊のひとつ「成始伯線ソンシベク」が次稿で示す南労党の活動とは全く別に南朝鮮地域で国会議員への浸透工作を図っていた事例に示されるように、金日成は早くから朝鮮統一に向けて主導権を掌握しようとした。

労働党の南北分立は、この朝鮮共産主義運動における主導権闘争に大きな転機を画した。『備忘録』の中には、1947年が明けると朴憲永を北朝鮮地域で活動させる問題と関連して、次のように記されていた。

「朴憲永を合法化させようという問題が私〔シトゥイコフー筆者〕から提起された。金日成は、そのようにする場合、朴憲永は南朝鮮で活動できなくなるだろうと主張し、肯定的な答弁を回避した。南北朝鮮労働党の単一の指導部が創設されるならば、誰が指導者となるのか？ 金料奉あるいは許憲、彼らの間に圧力が芽生えるだろう。もしも朴憲永を指名すれば、金料奉が反対するだろうし、許憲はどのように身を処するのか、わからない。一定の時間が過ぎた後、この問題を再検討することを約束した。」⁽⁵⁸⁾

ここから読みとれるように、朴憲永が米軍政から逮捕令を出されて既に北朝鮮地域に逃避して来ているのにもかかわらず、金日成は朴憲永が北朝鮮地域で活動する「合法化」に否定的な反応を示した。これは朴憲永のためと言うよりも、金日成の主導権に挑戦される事態を恐れてのことだったのであろう。しかも労働党の「単一の指導部」における政治指導者の中に、金日成の名前は入っていなかった。のちに詳細に論述することになる南北朝鮮労働党の合党すなわち朝鮮労働党の結成に際し、確かに金日成は同党中央委員会委員長には選出されなかった証拠がいくつか発見できるのである⁽⁵⁹⁾。

ともあれ労働党の南北分立により朝鮮共産主義運動は、ソ連軍に統括されていたとは言え、ふたつの指導部を持つことになった。そして、朝鮮統一へ向かう闘争において直接的にこれを担った南労党の活動に北労党が非公式ながらも関与するという複雑な政治発展を見ることになった。こうして南北朝鮮労働党間の朝鮮統一における役割の相違は朝鮮共産主義運動の主導権闘争と結び付き、南朝鮮地域で南労党を主導勢力として展開された武装パルチザン闘争に対する評価のズレから、次第に南朝鮮地域への朝鮮人民軍の投入戦術へと金日成を突き動かしていくことになる。

ところが労働党の南北分立を米軍政の立場から見ると、事態は全く異なって観察された。前稿での分析から明確なように、米軍政さらには米本国政府はもっぱら反共主義 vs 共産主義という対立の構図で事態を眺めていたから、南労党の結成に対する認識は冷戦思考そのものとならざるを得なかった。

南労党の結成に対する米軍政の認識

米軍政は早くから三党合党の動きを「左右合作」運動と関連させて詳しく観察していた。左翼陣営の分裂に際しレングダン (William Langdon) は「このあからさまな分裂がおそらく、より小さいがきれいになった人民党を自らの民族主義的な路線に従わせ、より強大だが特異で孤立した共産党を多分ふたつに最終分離し、人民戦線〔「民戦」の意味－筆者〕の自動的な解体をもたらす結果となるだろう」と分析していた⁽⁶⁰⁾。

1946年10月に入り南朝鮮地域で民衆蜂起が拡散する中、米軍政の経済顧問だったバンス (Arthur Bunce) は平壤を訪問、ソ連軍顧問のバラサノフ (G.M. Balasanov) と会談して「米国は共産主義者たちに支配された臨時政府〔朝鮮民主主義臨時政府〕の意－筆者〕の樹立にどんなことがあっても同意しない。それは、ソヴェト・ロシアの傀儡国家となるだろう」と述べていた。バラサノフはこれに反発、「米国が南朝鮮で反動的な右翼勢力を支持しており、ソ連は李承晩や金九に支配されるどのような臨時政府も受け入れないだろう」とやり返した⁽⁶¹⁾。この米ソ間の対立は「秋季の米穀収集後にロシアが南朝鮮への侵攻を計画している証拠が明らかになりつつある」という東京からの驚くべき連絡でさらに激化したと思われる⁽⁶²⁾。

ここから社労党が結成される過程について米軍政では、次のようなおもしろい見解を示していた。「〔三党内の〕肅清活動の刺激は、合作活動で金奎植博士と協力し、朴憲永を交代させるよう平壤の指導者たちから呂運亨に下された明白な許可だった。呂運亨は9月の最終週に平壤へ行った。それは明白に、平壤の指導者たちに朴憲永の破壊的な計画からその支持を撤回させ、米国当局ならびに金奎植博士に代表される穏健右派と自身との協力へ承認を勝ち取るためだった。この承認がまもなくなされつつあるのは明確だ(後略)。」⁽⁶³⁾ 金奎植は「臨時政府」の副主席だった人物である。

だが米軍政の見解とは異なり、呂運亨が平壤を訪れた際の記録では「金日成と呂運亨との会談があった。呂運亨は何度もソ連軍司令部の指導部との会談を強く主張し」たとされ、呂運亨の要求により会談が開かれたのである。この会談は「良い雰囲気の中で3時間、継続した。会談にはロマネンコ (Andrei Rommanenko)、シャプシン (I.A.Shabshin)、呂運亨、金日成、文日フイが参席した。彼 [呂運亨－筆者] が関心を表明した全ての問題について答弁が与えられた。第1問題－米ソ共同委員会について。彼は共同委員会を迅速に再開することを要請している。第2問題－信頼と相互関係について。北朝鮮に対し良い印象を持つことになった。北朝鮮の状況に満足した。」⁽⁶⁴⁾

以上のように、会談で呂運亨が「承認を勝ち取る」話はなされていない。もちろん、もしもなされていたならば、最重要事項としてシトウイコフが特記していたはずである。前述した通りソ連軍からする朴憲永に対する評価は高く、シトウイコフが呂運亨のために朴憲永を犠牲にするはずはなかった。

実際に呂運亨は、10月1日に平壤を離れてソウルに戻った後、第6次「左右合作」委員会に欠席していた⁽⁶⁵⁾。ところが米軍政は「呂運亨の平壤からの帰還に伴い、3つの清められた左翼政党の融合が急速に進展し、ついに彼らは呂運亨の下に単一の『社会労働党』へ統合されるに至った」と記している⁽⁶⁶⁾。米軍政は、老獪な政治家である呂運亨の手玉に取られたと言うべきであろうか。

したがって南労党が結成される過程で「国際主義的共産主義者」が「民族主義的共産主義者」に打ち勝ったことが明白になった時でさえも米軍政は、「彼の明確に関与した左右合作委員会をこの統合されたグループが支持するという理解の下で」、呂運亨が社労党と南労党の統合を主張したと見なしていた⁽⁶⁷⁾。ただし米軍政が「南労党の結成 (共産党と人民党ならびに新民党との統合) は、共産党指導者の朴憲永が逮捕から身を隠して以来、おそらく指導権の欠如に陥っている過激な左翼分子たちの政治活動への入り口となり得る」と評価していたことは、本格的な闘争開始の予見だったと言えよう⁽⁶⁸⁾。

小結論

米軍政が推進した「左右合作」運動に対する朝鮮共産党、朝鮮人民党、南朝鮮新民党の路線対立は、南朝鮮地域での左翼陣営の主導権問題と連結することにより、三党合党の過程で朴憲永派と反朴憲永派に左翼陣営を分裂させた。しかし、労働党の結成はスターリンが金日成と朴憲永に直接あたえた指令として「至上命令」だった以上、ソ連軍からする高い評価とは別に北労党が北朝鮮地域への朴憲永の影響力拡大を警戒していたとしても、南朝鮮地域の三党合党に北労党も協力せざるを得なかった。

北労党とその背後にいるソ連軍は、民衆蜂起の中で強行された南労党の結成過程で呂運亨、白南雲、姜進など南朝鮮地域の政治指導者たちと会談し、社労党の結成を思い止まらせようとした。社労党はその結成過程からして南労党との統合を運命づけられていたとも見られ、正式に社労党が結成されると前後して北労党は決定書を採択して公表、朴憲永のイニシャチヴと南労党の結成を正当化するよう援助したのである。

こうして北労党が民族主義左派と共産主義勢力との統合に成功した大衆政党だったのと正反対に、南労党は朴憲永派を結集した階級政党として発足した。ここから南労党は民族ブルジョアジーや地主が結集した韓国民衆党、それが支持する「臨時政府」、そして彼らの背後にいる米軍政と激しく対立することになった。特に米軍政が公布した「立法議院」選挙を「右翼メンバーの圧倒的な多数が選出されるだろう」と予測する中⁽⁶⁹⁾、南労党は結成当初から困難な活動を余儀なくされた。

すなわち南北朝鮮に分断体制が形成される時期、南労党は次第に過激な活動を展開せざるを得なくなっていた。1946年の民衆蜂起の中から開始された武装パルチザン闘争が南労党の指導により本格的に展

開されるに至り、南朝鮮地域は次第に内戦状況に陥っていく。そこから南労党の活動は、労働党の南北分立の下で朝鮮統一の戦術における北労党とのズレを生み出してもいくのである。

註

- (1) 本研究（二）北朝鮮労働党の結成、を参照されたい。『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第5集第2号（佐賀、2001年3月）、p.113-114.
- (2) 『毎日新聞』1945年10月2日、『資料大韓民国史』1、서울、大韓民國文教部國史編纂委員會、1970年、pp.175-177。【以下『韓国史』と略記】
- (3) 「人民党的 路線」『韓國現代史資料叢書』11、서울、돌베개、1986年、p.3。【以下『叢書』と略記】
- (4) 呂運亨「單獨政府 樹立과 左右合作」（1946年6月11日）、金南植編『「南勞黨」研究資料集』第II輯、서울、高麗大學校亞細亞問題研究所、1974年、p.302。【以下「資料集」と略記】
- (5) 白南雲『朝鮮民族의 進路』서울、新建社、1946年。『叢書』11、p.47, 58.
- (6) 毛沢東はスノー（Edgar Snow）との会見で早くから「中国革命のテーゼには二つの主要な目標があります。第一は民族民主革命の任務を達成することです。第二は社会革命です。」と述べていた。E. Snow, *Red Star over China*（松岡洋子訳『中国の赤い星』筑摩書房、1973年、p.355.）
- (7) 『南朝鮮人民抗争』서울、1946年、p.17.この資料の出版社は記載されていない。
- (8) United States of America, Department of State, *Foreign Relations of the United States*, 1946, Vol. VIII (Washington, D.C., 1976), pp.754-755。【以下“FRUS”と略記】
- (9) 『左翼事件實録』第一卷、서울、大檢察廳搜查局、1965年、p.246.
- (10) 『南朝鮮人民抗争』p.41.
- (11) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, pp.722-723.
- (12) 「合黨問題에 對하여 黨内同志諸君에 告함(一九四六年八月五日)」『朝鮮共產黨文件資料集(1945~1946)』春川、翰林大學校아사아文化研究所、1993年、pp.203-204.
- (13) 『朝鮮日報』1946年10月17日、『韓国史』3、pp.568-571.
- (14) 『朝鮮日報』1946年11月14日、『韓国史』3、pp.797-798.
- (15) 中央日報社統一文化研究所編集『스티코프(シトゥイコフ) 備忘録』第1巻ならびに第2巻、서울、中央日報社統一文化研究所所蔵。本資料は、中央日報社ロシア駐在員がシトゥイコフの残した記録を収集して翻訳、編集したもので、同社統一文化研究所の李東鉉研究員のご厚意により閲覧が可能となった。だが、その原典については開示をしていただけなかった。
- (16) 「1946年9月16日」、同上書、第1巻、p.5。シトゥイコフは対独戦の後、対日参戦と共に朝鮮半島へ進軍、事実上そこでの最高責任者となり、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の樹立に非常に大きな影響力を振った。のちに彼は北朝鮮駐在の初代ソ連大使となった。
- (17) 「1946年9月24日」、同上書、第1巻、p.8.
- (18) 「1946年9月26日」、同上書、第1巻、p.9.
- (19) 「1946年9月27日」、同上書、第1巻、pp.10-11.
- (20) 「1946年10月21日」、同上書、第1巻、p.15.
- (21) 「1946年10月22日」、同上書、第1巻、p.16。おそらくここで言う「主要指導者3名」とは、朴憲永、呂運亨、白南雲を指すと思われる。平壤で後二者を説得する作戦だったのであろう。

- (22) 「1946年10月22日」、同上書、第1巻、p.16. 李東鉉氏は姜進と会ったのを金日成だと解釈しているが、姜進が平壤に来るのを「反対した」金日成のはずがない。
- (23) 「1946年10月21日」、同上書、第1巻、p.15.
- (24) 金南植『南労黨研究』 서울、돌베개、1984年、p.392.
- (25) John Merrill, “Internal Warfare in Korea, 1948-1950 : The Local Setting of Korean War” , Bruce Cumings(ed), *Child of Conflict*—Korean-American Relationship,1943-1953— (Seattle and London : Washington Univ. Press, 1983), p.138.
- (26) 「1946年10月21日」、『備忘録』第1巻、p.15.
- (27) 「1946年11月4日」、同上書、第1巻、p.23.
- (28) 「1946年9月18日」、同上書、第1巻、p.6. シトウイコフは後日、金料奉が「南朝鮮情勢に動揺する姿勢を示し、南朝鮮の反動派に対して辛辣な批判を加えなかった」と不満を記している。つまり米国に対する強硬策は敬遠されたが、「反動派」への批判は求められたわけである。「1946年10月25日」、同上書、第1巻、p.18.
- (29) スターリンが米ソ対決を恐れていた事実は、朝鮮戦争の開戦決定過程を研究したウェザズビー女史が最近の論文でも明らかにしている。K.Weathersby, “Shoud We Fear This ?’ Stalin and the Danger of War with the America” , *CWIHP Working Paper*,No.39 (Washington,D.C.,July 2002), p.2.
- (30) 「1946年11月12日」、『備忘録』第1巻、p.24.
- (31) 「1946年11月4日」、同上書、第1巻、p.23.
- (32) 「1946年10月22日」、同上書、第1巻、p.16.
- (33) 「1946年10月7日」、同上書、第1巻、p.14.
- (34) 「1946年11月12日」、同上書、第1巻、pp.23-24.
- (35) 「1946年11月12日」、同上書、第1巻、p.24.
- (36) この点については、本研究（七）朝鮮労働党と朝鮮戦争の開戦決定、を参照されたい。
- (37) 「1946年10月7日」、『備忘録』第1巻、p.14.
- (38) 『蘇聯軍事顧問團長 라주바예프의 6・25戰爭報告書』 1、서울、國防部軍史編纂研究所、2001年、pp.30-31.
- (39) 同上書、p.27.
- (40) 金日成大学副学長だった朴一は、金料奉と金日成にマルクス主義の基本を教授したという。朴一「金日成は私にマルクス・レーニン主義を学んだ」黄民基編『金日成調書—北朝鮮の支配者—その罪と罰』光文社、1992年、pp.59-60.
- (41) 「1946年9月19日」および「1946年10月1日」、『備忘録』第1巻、p.7, 12. なお、この9月19日の記録では李康國が「合意が達成されないならば、南朝鮮に左翼三党をそのまま存続させることを要請した」と書かれている。朴憲永派内部での三党合党への反対として注目される。
- (42) 「1946年12月6日」、『備忘録』第2巻、p.2.
- (43) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War*, Vol.2—The Roaring of the Catract1947—1950— (Princeton,New Jersey;Princeton Univ.Press,1991),P.240.
- (44) 南労党と社労党、さらには南労党と北労党のどちらに加担するかが当時の「革命家」にとって政治生命を左右する重大事だったと高峻石（故人）が書き残している。『南朝鮮労働党史』勁草書房、1978年、pp.154-155.

- (45) 「南朝鮮労働党綱領」、金大敬「一般情勢와 우리의 課業——南勞黨結成大會를 보고——」『週報民主主義』9号（서울,1947年1月）、『叢書』7、pp.6-7.
- (46) 高峻石『朝鮮1945-1950—革命史への証言』三一書房、1972年、p.122.
- (47) シトウイコフは南勞党結成大会の様態を記した記事で「(1) 党綱領を採択する（我々のもの）」とわざわざ書いていた。「1946年12月2日」『備忘録』第2巻、p.1.
- (48) 「南朝鮮『社會労働黨』에 關하여（北朝鮮労働黨中央常務委員會第11次會議決定書,1946年11月16日）」『絶對秘密 決定集(1946.9-1948.3 北朝鮮労働黨中央常務委員會)』平壤,1948年,p.62. 当時の南朝鮮地域で公開されたこの決定書もごく細かい部分で語句の違いがある程度で、ほとんどは決定書の原本と同一である。『叢書』7、p.5.
- (49) 『朝鮮日報』1946年11月19日、21日、『韓国史』3、p.847,865.
- (50) 『서울新聞』1946年11月24日、『韓国史』3、p.903.
- (51) 『叢書』7、pp.6-8. また『朝鮮日報』1946年11月24日、『韓国史』3、pp.904-905.
- (52) 「1946年12月2日」、『備忘録』第2巻、p.1.
- (53) 同大会の詳細はこの大会に参加した高峻石の記録による。高峻石『南朝鮮労働党史』pp.86-90.
- (54) 「1946年12月2日」、『備忘録』第2巻、p.1. また『서울新聞』1946年11月26日、『韓国史』3、pp.905-906.
- (55) 「1946年12月2日」、『備忘録』第2巻、p.1. 高峻石は同年11月10日に「中央機構の詮衡」を行ったとしているが、シトウイコフの記録から見ると日付の間違いと思われる。高峻石『南朝鮮労働党史』pp.89-90.
- (56) 「1946年12月2日」、『備忘録』第2巻、p.1.
- (57) 高峻石『南朝鮮労働党史』pp.154-155.
- (58) 「1947年1月4日」、『備忘録』第2巻、p.20.
- (59) 筆者はこの点について既に学会報告を行ったことがある。森善宣「朴憲永の朝鮮戦争——開戦決定過程に関する再考察——」、日本国際政治学会2002年度研究集会東アジア国際政治史分科会II、淡路夢舞台国際会議場、2002年11月17日。
- (60) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.730.
- (61) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.744 興味深いことに、パンスはこの平壤旅行で曹晩植と面会した。
- (62) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.750
- (63) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.755
- (64) 「1946年9月25日」『備忘録』第1巻、p.9. ロマネンコは政治担当ソ連軍将校、シャプシンはソウル駐在ソ連領事、文日は金日成のロシア語通訳官だった。
- (65) ロマネンコは「呂運亨は去り、無事に38度線を越えた」と報告していた。「1946年10月1日」『備忘録』第1巻、p.11.
- (66) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.755
- (67) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.771
- (68) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.779
- (69) *FRUS*, 1946, Vol. VIII, p.763